

マレーシア・シンガポール海洋関係博物館見学会の記録

A record of visit to Malaysian Singaporean marine museum society concerned

片桐千亜紀・宮城弘樹

Katagiri Chiaki・Miyagi Hiroki

ABSTRACT: This report is the record that visited Malaysian Singaporean museums for four days until from June 27, 2005 to June 30. The institution which I observed is the Singaporean Department of Public Safety / container terminal (PSA) / civilization museum / Coat caning remains in national history Museum / national museum (Kuala Lumpur), Malacca ocean museum / Malacca history Museum / Saint Paul church (Malacca), Singapore in Malaysia. Underwater archaeology was prosperous, and Malaysia was able to watch a submergence ship-related document at many museums. There were Okinawa and the thing which resembled it, and the ceramics in a to 15 century were able to find a commonality of the history in the 14th century when I watched it in a holed shell of a spoon and a product made in batik Batty of a product made in turbo which I excavated with a burial human bone from a to 10 century and remains thought about in the ninth century when I looked elsewhere in a national museum, Singaporean Coat caning remains. The Sea of Japan thing public information association which took the furtherance of a Japanese foundation planned this visit society and participated.

1. はじめに

去る2005年6月26日（日）～7月1日（金）にかけて、日本科学財団の助成金を得た日本海事広報協会が企画した「マレーシア・シンガポール海洋関係博物館等見学会」に参加した。マレー半島南端のマラッカ海峡では琉球王国が海外貿易で繁栄していた時代、活発に貿易を行った記録がある。また、水中考古学も盛んで多数の沈船調査を実施しており、専門の研究者もいるという。筆者らは主にこれら「琉球関連について」と「沈船調査の事例」の2つの視点から、情報を収集し勉強することを目的とした。沖縄本島からマレー半島までの道のりは遠かったが、初めて訪れる多民族国家の地は刺激に満ちており、充実したものであった。その記録について概要をここに記す。

2. 旅の日程

1日目：6月26日（日） 沖縄→成田

沖縄から千葉県成田に移動。

2日目：6月27日（月） 成田→クアラルンプール

成田空港発（12:35）→ クアラルンプール着（18:35）。宿泊The Regent。

3日目：6月28日（火） クアラルンプール→マラッカ

A. マレーシア国立歴史博物館、B. マレーシア国立博物館。夕方マラッカ着。
セント・ポール教会跡。宿泊Hotel Equatorial。

4日目：6月29日（水） マラッカ→シンガポール

C. マラッカ海洋博物館、D. マラッカ歴史博物館。夕方シンガポール着。
宿泊MERITUS MANDARIN。

5日目：6月30日（木） シンガポール→成田

E. PSAコンテナターミナル、F. アジア文明博物館、G. コートカニング遺跡。夕方シンガポール発。

6日目：7月1日（金） 成田→沖縄

→成田着（6:40）。成田空港から沖縄へ移動。全日程終了。



第1図 クアラルンプール・マラッカ・シンガポールの位置

3. 参加メンバー

石川慶二（日本海事広報協会）、石原義剛（団長、海の博物館）、黒住耐二（千葉県立中央博物館）、瀬戸久夫（財団法人千葉県文化財センター）、山本哲（東京都港区立港郷土資料館）、飯沼一雄（船の科学館）、上出純宏（みくに龍翔館）、斎藤義郎（呉市海事歴史科学館）、前田秀人（平戸市役所）、岡山芳治（松浦史料博物館）、木村幾多郎（大分市歴史資料館）、宮城弘樹（今帰仁村教育委員会）、片桐千亜紀（沖縄県立埋蔵文化財センター）、市岡卓（日本海難防止協会シンガポール連絡事務所） 以上14名

4. 研修と旅の記録

1) 成田そして旅立ち

成田への移動。片桐は朝早くの飛行機で羽田に移動し、成田のホテルへと先にチェックインをすませた。宮城が携帯電話という文明の利機を有しないため、何時に合流するのかわからず、ひたすらホテルにて到着を待つことになった。その夜、毎週見ている大河ドラマ『義経』に熱中している頃、ようやく宮城が到着した。『義経』を見終わり、二人は夜の居酒屋へと移動した。これから始まる未知の世界への希望について、焼酎を飲みながら熱く議論(?)を交わした。居酒屋では、つまみの注文をする宮城のなまった日本語（発音）が店員に聞き取れないという事件がおきた。翌日は成田空港に10:30集合であったが、案の定遅刻していき多くの人に迷惑をかけた（すみませんでした）。12:25、飛行機に搭乗して宮城は早くもスチュワーデスにビールを注文。

2) クアラルンプール

18:35（現地時間）、ようやくマレーシアの首都、クアラルンプールに到着した。バスにてリージェントホテルに移動したが、車窓から眺めた夜のクアラルンプールはその広大さと異国情緒溢れる町並みの美しさとは見とれた程である。そういえばマレーシアはネイティブに加え、中国系、インド系等が混在する多民族国家であり、人口密度も日本と比較してとても薄い。ホテルではチェックインをしたのち、酒を求めて繁華街に繰り出した。しかし、イスラム教徒の多いこの地域は酒を豊富に揃えている店を探すことができず、街をウロウロと彷徨うことになった。ビールを買って部屋に戻り酒盛りを始めた。窓



写真1 ツインタワー（部屋の窓から）

から眺めた夜景を肴にビールはすすみ、名所であるツインタワーの美しさに心地よく酔い、明日への期待を膨らませた。

A. マレーシア国立歴史博物館

9:00にホテルを出発しバスにて国立歴史博物館に向かう。建物自体が歴史的なものであり、当初はインドの銀行として1888年に建設され、第2次世界大戦では日本軍の通信基地として利用された。1991年に博物館としてオープンした。敷地は21,000m²、現在は無料で見学することができるが、年内には

見学料を取る予定とのこと。メディアに積極的に広報活動をしており、小中学生を対象に体験学習等を実施している。国立大学との共同調査も実施しているという。館内は先史時代から近現代まで総合的な遺物を展示している。

特に目を引いたのは、埋葬遺構のレプリカである。AD 9 世紀～10 世紀頃の遺跡で、埋葬された人骨の副葬品としてヤコウガイの匙・サラサバティの貝輪が出土していることを確認することができた。



写真 2 マレーシア国立歴史博物館



写真 3 館長他との懇談会



写真 4 埋葬遺構検出状況



写真 5 貝輪出土状況

B. マレーシア国立博物館

本博物館は1963年にオープンした。伝統的なマレー建築によって建設されており、敷地も広大である。興味深かったのは、マレー地方には洗骨した人骨をビルマから輸入した甕に入れ、住居の下に埋葬する風習があることである。いよいよ片桐が最も興味を持っていたマリングャラリーの見学をした。有名なダイアナ号を始めとした、マレー半島沿岸海域で発見され、調査された沈没船関係の遺物を多数展示している。特に船体が検出された状況をジオラマとして展示している様子は、雰囲気伝わるすばらしいものであった。陶磁器群



写真 6 沈船検出状況（ジオラマ）

の一部は、沖縄の多良間島高田海岸で表採される陶磁器群（1860年に同海岸沖で沈没・座礁したファ

ン・ボッセ号の積荷と考えられる)と酷似する。マレー半島沿岸海域では多数の沈没船及び関係遺物散布地が確認されており、館長の話ではこのように多数の沈没船が発見された経緯は、そのほとんどが漁師や民間からの情報であるという。

3) マラッカ

人口70万人を要する歴史深い街である。夕方、メンバーと中国人居留区(チャイナタウン)の骨董屋を物色しつつ、セント・ポール教会跡の見学をした。この教会はかの有名なフランシスコ・ザビエルが日本からの帰りに寄り、7年間に過ごし、死亡した場所である。彼の遺体は9ヶ月間この地に埋葬されたが、その後発掘され、インドのゴアで再度埋葬されたという。琉球王国時代の琉球人がこの遙か遠い地で活発な貿易活動を展開していたかと思うと、街並みひとつひとつが感慨深かった。夜、再び酒を求めて夜の街を徘徊した。やはり酒が見つからず半ば諦めかけた所で、ようやく『7つの海』というすばらしい名前のウィスキーが購入できた。部屋では木村幾多郎氏を交えて陶磁器の流通について議論をしつつ酒盛りをした。



写真7 マラッカ河口



写真8 マラッカの町並

C. マラッカ海洋博物館

本博物館はマラッカ川の脇にあり、マラッカの中でも一番人気のある博物館とされている。1512年にマラッカを攻撃して沈没したポルトガル船『フローラ・デ・ラ・マール号』を復元し、船内には実際に沈船から回収された遺物を展示している。ここにもダイアナ号の遺物が展示されている。ダイアナ号関係の遺物は、マレーシアの各博物館で分けてそれぞれ展示しているようだ。この他、中国・ヨーロッパを始めとした様々な地域の船舶模型が展示されている。

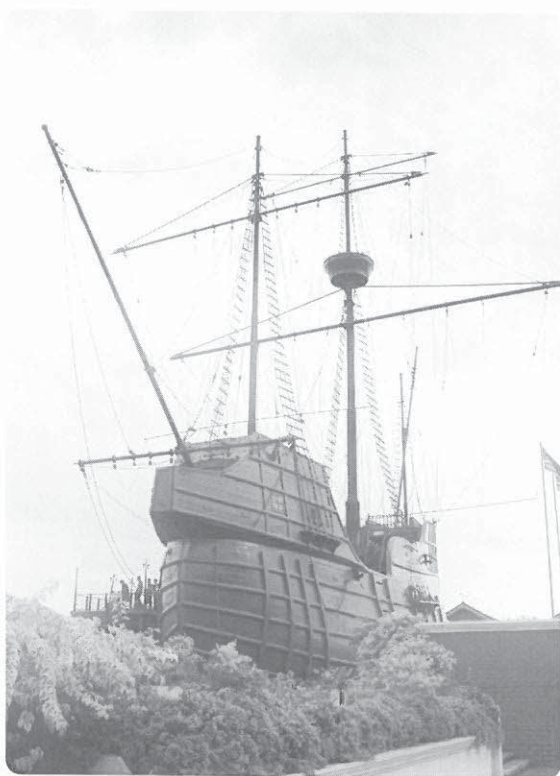


写真9 フローラ・デ・ラ・マール号



写真10 沈船から回収された遺物

D. マラッカ歴史博物館

本博物館は1641年にオランダの総督府として建設されたものである。マラッカは貿易の中継基地として次々と列強に占領された歴史を持つとともに、東と西を繋ぐ重要な港として繁栄をした。文献にはこの地でレキオ（琉球人）と交易をした記録が残っており、琉球王国の人々がみずからこの地まで訪れていたことがわかっている。1400年～1511年までは独立国マラッカ王国として中国や周辺諸国と貿易を展開する。ちょうど沖縄が繁栄を極めた時期と似ている。1511年～1641年までは大航海時代を迎えていたポルトガルによって占領され、城塞が建設された。1641年～1824年までは、当時、飛ぶ鳥を落とす勢いがあったオランダによって占領された。1824年～1957年まではイギリスによって占領されていた。イギリス占領時代の1942年～1945年までは第2次世界大戦によって日本軍が占領していた。この博物館のオフィスルームには、なんとデヴィ婦人の写真が飾ってあった。

マラッカを離れる際、車中から中国人が葬られている墓が集中する丘が見えた。いわゆる亀甲墓が丘陵の斜面に並んでいる。「もしかしたら、琉球の時代に船上で没した琉球人が葬られているのでは」そんな冗談を交わしながらマラッカを離れた。短期間では琉球人の足跡を訪ねることができなかったが、私達にとってはまた訪れたい街のひとつとして深く記憶された。



写真11 マラッカ歴史博物館

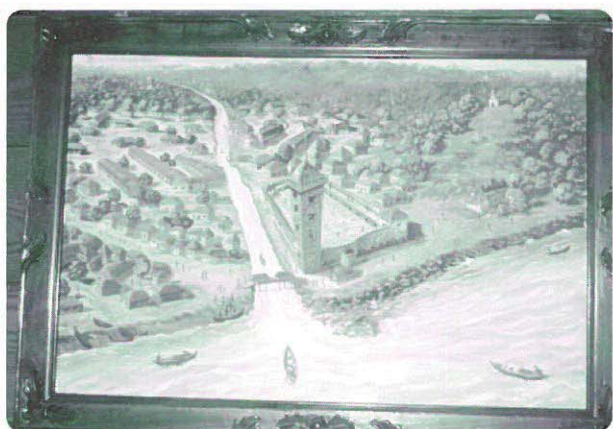


写真12 オランダ領時代のマラッカ



写真13 亀甲墓群の丘

4) シンガポール

シンガポールへ向かう途中、国境を越えるため入国手続きをした。シンガポールでは国外からのタバコの持ち込みには高額関税がかけられる。すでに入国審査直前までタバコを携帯していた研修メンバーの喫煙者は高額関税に恐れ慄いた。シンガポールへ到着。驚くほど綺麗な街である。小さな国のため、ゴミ等の処理にはことのほか気をつけている。シンガポールは交通渋滞等を緩和するため車は驚くほど高い、ざっと日本の5倍だと言う。その代わりバスやタクシー等の交通機関がとても安い。また、シンガポール人は肉体労働がきらいで、道路建設等の各種工事や清掃業等は外国人労働者を雇用して労働力としている。マレーシアより国境を越え日帰りで通うものが多いとう。ホテルへチェックイン後、タクシー（安かった!）で屋台街へ行き夕食を食べる。

E. PSAコンテナターミナル

世界第1位（当時）のコンテナターミナルである。ここは世界中から集まった船舶が荷物の積み換えを行い、再び各地へ散っていく場所である。最新のコンピューター技術を導入し、徹底した管理の下で無駄のないスピーディーな積み換えをする。巨大なクレーンが乱立し目まぐるしく動くさまは、圧巻であった。いかに無駄なく円滑に積み換えを行って、再び船を出航させるかがコンテナターミナルとして重要な要素であるという。昼食時に飲茶を食べたレストランは、ターミナルとシンガポール海峡が見渡せ、沖には多数の船が停泊し、さらにその向こうにはインドネシア領であるボルネオ島がうっすらと見えるという絶好のロケーションであった。この海域は東西海上航路の要衝地として国際的に重要な場所でありつづけている。



写真14 コンテナターミナル



写真15 海峡で待機する船舶

F. アジア文明博物館

博物館の前面にはかの有名なラッフルズ像が建っていた。この博物館でもっとも良かったことは、9世紀、唐時代の沈没船黒石号から引き揚げられた陶磁器群が展示してあったことである。唐代の陶磁器群などは普段なかなかお目にかかれない代物であり、かなり興味をそそられたが、じっくり観察することができず、写真に残すこともできなかったのが残念至極であった。他の展示は文明博物館というだけって様々な時代と国の遺物が多数展示しており、見ごたえも充分、再び訪れたいと思わせるものであった。



写真16 アジア文明博物館

G. コートカニング遺跡

夕方、黒住耐二氏・宮城・片桐の3名はわがままを言って、コートカニング遺跡の見学をした。この遺跡は小高い丘に立地しており、マラッカ王国時代は聖域とされていたようだ。興味深かったのは中国産陶磁器が多量に出土していたことである。マラッカ王国時代の中国や周辺諸国との交易を語るものと思われるが、中継貿易を展開していた琉球王国よりもたらされた遺物が含まれている可能性もあると想像すると、じっくりと比較検討をしてみたくなった。

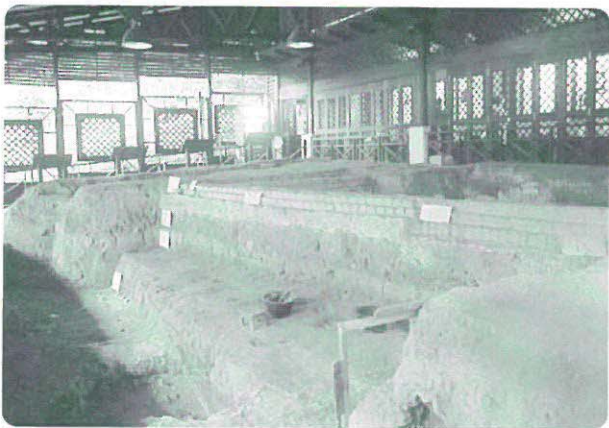


写真17 コートカニング遺跡の遺構展示



写真18 出土遺物

5) 帰路

ついに日本へそして沖縄に帰る時がやってきた。バスにて空港へ向かう。空港で最後のお土産を購入した。宮城は残った金でビールを購入したがったが、ギリギリ足りなくて断念した。飛行機内でさっそくスチュワーデスにビールを要求していたことは言うまでもない。

4. おわりに

ハードなスケジュールであったが、訪ねる先々の場所が新鮮で刺激的な旅であった。原始・古代については南島文化との関係について、中世・近世においては琉球王国との交易・交流の痕跡について興味を持って参加した見学会であった。新しい知見を得るとともに、多くの方々と出会ったことは貴重な財産となり、参加してよかったとつくづく思えた。空港では出発直前まで酒を求めて彷徨ったことが忘れられない。思えば、宮城は常に酒を求め続けていた旅であった。沖縄からマレーシア・シンガポールへ旅立たれる方は、泡盛の持参をお勧めする。この見学会で得た興味深い情報についてまとめたい。

- 1) 古代においては埋葬人骨とそれにとりまう貝輪や貝匙といった、沖縄で出土するものと似通った製品が副葬品として出土している。
- 2) マレーシアでは遺体を風葬した後、洗骨して甕に収め、住居の床下に埋葬する風習があった。その甕はビルマから輸入したものである。
- 3) 水中考古学が盛んであり多数の沈没船調査がされている。沈没船調査は企業と実施することが多く、資金は企業から出資される。調査前に予め出土品の分配方法等について協議を行い、合意が整った後に実施する。企業は分配された出土遺物を売って資金回収する。
- 4) マラッカ王国時代は小高い丘陵を聖域としており、14～15世紀の遺跡からは沖縄と類似する組成の陶磁器が出土する。

最後に、このようなすばらしい見学会の機会をあたえて下さった日本科学財団及び日本海事広報協会の方々、そして、共に参加し、快適な旅にしてくださったメンバーのみなさんに感謝いたします。いずれまたお会いして、このような旅ができることを願います。

(かたぎり ちあき：調査課 専門員)
(みやぎ ひろき：今帰仁村教育委員会)